

## Contents

- 03 | 特集1 | 京都府立医科大学 夜久学長×吉本学長対談
- 07 | 特集2 | ROBOCON挑戦プロジェクト「ForteFibre」
- 09 | 教育NOW | 授業紹介「プログラミングⅡ」
- 11 | 研究室探訪1 | 分子化学系 外間進悟 助教
- 13 | 研究室探訪2 | 繊維学系 岡久陽子 教授
- 15 | がんばる工織大生
- 16 | 活躍する卒業生
- 17 | 美術工芸資料館収蔵品紹介
- 19 | Topics
- 21 | Information



# 医工連携を切り口に 地域、そして日本が抱える 課題に立ち向かう

同じ京都に位置する大学として、  
それぞれの専門性を生かしながら連携を深めている  
京都府立医科大学と京都工芸繊維大学。  
今回の特集では、京都府立医科大学の夜久均学長と  
本学の吉本昌広学長による対談をお届けします。

## 分野を越えた連携・交流が 新たな視点をもたらす

**吉本** 夜久先生は、私から見て先輩の学長に当たります。正式にお会いしたのは私が学長になってからですが、それ以前の副学長時代にも京都クオリアフォーラムの場で交流がありました。

**夜久** 私が京都クオリアフォーラムに参加したのは学長になってからです。京都大学前総長の山極壽一先生と堀場製作所の堀場厚会長が立ち上げに関わった、非常に斬新な会ですね。京都・奈良の9大学と京都に根差した8企業のトップ層が集まり、異文化交流や人材育成を軸に、さまざまなプロジェクトが動いています。

**吉本** 企業の方がよく言われているのが、「大学は何をやっているのか見えない。タコつぼの中で研究しているみたいだ」と。企業からそう思われているのは、研究成果を社会実装につなげていくことは困難です。フォーラムに参加して課題を再認識

したことから、当時、理事・副学長の私がまず取り組んだのが、京都企業に参画してもらい、各種の共同研究だけでなく、博士学生を中心に人材育成も共に行うような仕組みづくりです。これは、京都クオリアフォーラムに参加して企業の生の意見をもらえたからこそ生まれたモチベーションですね。他には、このフォーラムで、ある社長とお話で出た、「われわれが求めているのは営業ができる人材だ」という言葉も印象に残っています。いわゆる技術営業ですね。私も専門的な装置を購入する時は、販売担当者がどれだけ技術的な知識を持っているかを吟味しながら話を聞きます。専門的な知識を持つことがベースにあって、加えてコミュニケーション力を備え、顧客の課題解決や新たなブランづくりにつなげる人材が必要とされています。

**夜久** スペシャリストでありつつ、ジェネラリストでもある人が産業界には求められているということですね。私は堀場会長と「研究者の資質」について

話したことがありますが、その時には「ひらめき」というキーワードが出ました。確かに、ノーベル賞を受賞するような偉大な研究もひらめきから生まれます。いろいろ考えると、「ひらめき」と「思い付き」は別物なんですよ。思い付きは偶然の産物でバックグラウンドがないのに対して、ひらめきは四六時中そのことを考え続ける中で生まれるもの。iPS細胞を発見した山中伸弥教授も、1日中ずっと考えていて、シャワーを浴びている時にぱっとアイデアをひらめいたと語っておられました。つまり物事をどれだけ掘り下げて考えるかが重要であり、それはアカデミアにも産業界にも共通して言えることだと思います。学長になってから分野を越えて人と話す機会が増え、面白い気付きを得られています。

**吉本** 私も学長になってからさまざまな方とお会いしていますが、学びの連続です。以前に京都市立芸術大学前学長の赤松玉女先生と対談をした時は、芸術教育のポイントが「観察」「客観 ▶





▶「視」であると伺いました。私の専門である半導体工学と同じで、新鮮な驚きがありましたね。

**夜久** 私も、建築家の同級生から似た話を聞いた経験があります。技術ではなく、観察力が精緻な絵を描かせると。観察から始まるのは医学の世界も同じです。私は心臓外科医ですが、外科手術の際には常に観察から始まります。自然科学、工学、医学、そしてアートに共通点があるというのは面白いですね。

#### 大学間連携をさらに強化し 地域に貢献する「アカデミアの集合体」へ

**夜久** 学長就任以来、私が注力したいと考えてきたことのひとつが、研究成果の社会実装です。研究のプロセスを0から10で表すとすると、0→1という「シーズの創出」はアカデミアの特権であり、大学の存在意義と言えます。ただその成果を社会実装する、医学でいうと患者さんまで送り届けるのは、特許や行政との関わりもあり、また、製品化・商品化、販売まで考えると、アカデミアだけの力では困難です。それを可能にする仕組みを強化・加速するため2024年に設置したのが京都府立医科大学産学産学連携機構K-MICSで、少しずつうまく機能し始めています。それを契機に、現在は産業界、行政、そして京都工芸繊維大学と共同で「地方大学・地域産業創生交付金事業(内閣府)」への申請準備も進めています。これまで、各診療科や研究部門単位では科研費やAMED(日本医療研究開発機構)などの大型資金を獲得してきていますが、大学全体としてのステータスを示すようなプロジェクトはなかなか実

現できていませんでした。今回、京都工芸繊維大学にも協力いただいている交付金事業への取り組みは、まさに大学の底力を示すチャンスです。産業創出・雇用促進に主眼を置いたこの事業にライフサイエンス系のテーマで臨む事例は数少なく、その点でもチャレンジングな試みといえます。公立医科大学としてのミッションである「近未来の地域医療の提供体制の充実」を目指し、産業界も巻き込んで何とか社会実装を実現したいと考えています。あと今後ぜひやりたいのは、われわれが研究連携を組んでいる4大学(京都工芸繊維大学、京都薬科大学、京都府立大学、京都府立医科大学)に京都市立芸術大学も含めた大学間連携のさらなる強化です。国際卓越研究大学として世界を相手にする京都大学や、数々の名だたる私立大学があるここ京都において、われわれは異なる専門性を結集して地域課題の解決に貢献していく。そんな役割を果たせればと考えています。すでに3大学(京都工芸繊維大学、京都府立医科大学、京都府立大学)では教養教育を共同化していますが、今後は5大学でそうした実績を積み重ねて、各大学の独自性を保ちながら「アカデミアの集合体」として機能させていく。それが京都という地の新たな強みになればと考えています。

**吉本** 今のお話は、本学にとっても非常にありがたいです。約125年前、本学の前身校である京都高等工芸学校の設立に際し、建学の精神として掲げられたのが「学理と応用」でした。最先端の科学を修め、それを応用することを重視していたのです。どこに応用するのかというと、人間の生活の基本である「衣食住」。特に繊維(衣)、

建築やデザイン(住)の分野を中心に特色を発揮してきました。それで、衣食住の次は何かと考えると「医療」なんです。工学はいろいろな産業とつながっているのですが、医療とはつながっていない。私たちから見ると医療の現場は病院にあり、どれだけ医療機器メーカーと関係を深めたとしても、そこまで到達できていない感覚がありました。そんな時に夜久先生とのご縁ができ、大学間で教員の関係も深まってきたところで、今回の地方大学・地域産業創生交付金事業の話が持ち上がって。そこから、医学に直結する分野だけでなく、工学や社会デザインの研究者も一緒になってプロジェクトを進める道筋が見えてきており、これからかたても楽しみです。

**夜久** われわれ医学の立場からも、同じことを感じています。医学の世界に閉じた研究だけでは広がりがなく、異分野との交流によって視野を広げないと、研究のさらなる向上は望めません。京都工芸繊維大学と取り組む具体的なアイデアが現時点で固まっているわけではありませんが、絶えず連携を持ちながら、その中で生まれてくるものを大切に育てていきたいなと思っています。

**吉本** 連携にはいろいろな形がありますよね。産学連携にしても、目の前の課題を解決するための技術開発もあれば、企業が気になりつつも、自社のリソースだけでは着手が難しいテーマを共同でやってみることもあります。私がこれまで経験した中で一番面白かったのが、半導体メーカーから試料提供を受けて進めた研究です。大学の設備だけではなかなか作れないような、極めて精密にコントロールされた試料をもらって、それをわれわれ独自の手法で測るだけで、非常に

価値のある基礎研究になりました。医工連携も一緒に、さまざまな関わり合い方があるのだと思います。

**夜久** すでに4大学の研究フォーラムを通じた交流もありますし、それ以外の枠組みでも、本学・貴学の研究者が共同研究を行っている事例は以前からあります。これまでは「線」として存在していたつながりを「面」として広げていくことが今後のテーマですね。

**吉本** それが京都府立大学や京都市立芸術大学にも広がっていったらいいですね。以前に4大学(京都工芸繊維大学、京都府立医科大学、京都府立大学、京都市立芸術大学)が参加する鴨川4プロジェクト「小さい焚火を囲む会」のイベントがありましたが、そこでの交流をきっかけに、貴学の教職員が京都市立芸術大学の見学に行くということがあったと伺いました。何がきっかけで新たな展開が生まれるか分からない、そこに面白さを感じます。

**夜久** 分かります。きっかけやチャンスを作り出し、可能性を広げることも、学長の仕事ですね。

**吉本** 「焚火」は京都市立芸術大学の小山田徹学長の探究テーマです。生活そのものが芸術という感覚をお持ちで、芸術が持つ自由度の高さ、その思考の柔軟さは、われわれにとっても大きな学びになります。

**夜久** 音楽が精神にいい影響を与えるなど、医学と芸術にはつながる要素が数多くあり、いろいろな連携の可能性があります。多様な分野とつながることで「バーチャル総合大学化」を進めるのは、一つの理想形かもしれません。

**吉本** 考え方についての学びという点では、本学に来ていただいている薬学の先生から伺ったお話も印象に残っています。その先生は、「医学部の先生というのは、常に患者さんや社会からのフィードバックを直接受けるので、真剣味がすさまじい」とおっしゃっていました。



**夜久** 診療行為に関してはその通りですね。

**吉本** 工学の場合は何かを設計・開発したとしても、企業を通して社会に出るため、フィードバックが直接自分に返ってくるまでには時間がかかります。その差から来る、社会との向き合い方の違いを感じ、自分たちの姿勢を見つめ直すきっかけに

なりました。

#### 地域の未来を見据え、 着実に取り組みを重ねていく

**夜久** 医学部を擁する公立大学として、われわれが向き合うべき課題は明確です。それは人口減少、特に地方における過疎化の問題です。京都府には日本海側に過疎地がありますが、そうしたエリアの地域医療を支えることが私たちの使命といえます。過疎地では、医師の高齢化や後継者不足によって、医療から取り残される人々が出てくるでしょう。そこに医療を届けるにはどうすればいいのか、それが近未来のわれわれに課せられた課題です。もはや人海戦術では太刀打ちできず、テクノロジーの投入なくしては課題の解決はかないません。その危機意識が、今回挑む地方創生プロジェクトの出発点でもあります。京都という場所は、最前線の過疎地がありながら、そこから2時間圏内に大都市とアカデミアが存在する。だからこそ、問題に介入しやすい点が特徴です。ここで「京都モデル」を確立し、全国あるいは海外へも展開していきたいと考えています。そのためには、研究や医療の枠にとどまらず、産業として自走できる「マネタイズ」の視点も不可欠です。雇用を生んで人材を育成する仕組みの実現を、アカデミア・産業界・自治体が一丸となって目指していきます。

**吉本** 京都府北部をはじめとする地域創生、地域課題の解決は極めて重要なテーマです。ただ従来の工学のアプローチでは、どうしても拡散的になってしまい、京都府内の真に必要なとされている場所にリソースを集中させることが難しい面もありました。今回は、医療という明確な課題に対して共同でプロジェクトに臨もうとしているということで、工学の立場からどのような貢献ができるのかを非常に楽しみにしています。社会デザインを専門とする研究者も参画しますし、新たな形の医工連携が進んでいくことに強い期待を寄せています。

**夜久** 必要とされているのは、まさに地域社会のデザインですね。医療を届けるということは、同時に情報や薬、日用品、さらには行政サービスを届けることでもあります。それらは全部つながっていて、人々の「生活」を形づくる要素です。2040年以降のさらに深刻な過疎化を見据えると、最終的には都市のあり方そのものを再構築するような、壮大なプロジェクトになり得ます。今回の事業を通して得られる医療を届けるノウハウは、あらゆるサービスを届ける仕組みづくりに生かしていけるかもしれません。

**吉本** 工学の研究には、個別の事象を細かく分析する方向性と、物事を統合してシステムを構築する方向性の2通りがありますが、本来の工学の使

命は「世のため、人のため」。後者の「統合」に本質があります。現在は社会デザイン分野からのアプローチを主としていますが、今後は工学を含めた多様な切り口から、大きなシステムづくりに貢献していきたいですね。

#### 学生たちへのメッセージ

**夜久** 私が学生の皆さんに伝えたいのは、「越境していきましょう」ということ。自分の殻に閉じこもらず、いろいろな人と話をするのが大切です。自分の専門分野の外に飛び出してみたり、海外に挑戦してみたり。もちろん、実行に移すにはちょっとした勇気がいるでしょう。ただ知っておいてほしいのは、スキーをする際に他者の滑った跡をフォローすると滑りやすいのですが、方向を変えられないし、前を滑っている人を追い越すこともできません。反対に、新雪を滑るとすぐ転んでしまうものの、どんな方向にでも、どんなに遠くにでも行けます。だからこそ、学生の皆さんには新雪の上を行ってほしい。転ぶことは決して失敗ではありません。転んだ後にいかに立ち上がるかが最も大事で、その姿を社会は見えています。ぜひ勇気を持って羽ばたいてください。

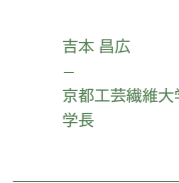


**吉本** 非常に共感できるお話です。一步踏み出す勇気の裏付けとなるのは、やはり自分自身への「自信」ではないでしょうか。授業でも研究でも課外活動でも、何でもいので「やり切った」「乗り越えた」という経験が自信の源になります。学生時代にぜひ突き抜けるような経験をして自信を得て、どんどん越境していってくれることを願います。

#### Interviewee



夜久 均  
—  
京都府立医科大学  
学長



吉本 昌広  
—  
京都工芸繊維大学  
学長



# 「NHK学生ロボコン優勝」 その目標に向かって 絶え間ない進化を

学生と教員の共同プロジェクトの一つである

ROBOCON挑戦プロジェクト「ForteFibre (フォルテフィブレ)」。

「強靱な繊維」を意味するこのチームで

力強く活動に取り組む東さくらさんに活動内容や面白さを伺いました。

## ForteFibreとは

ROBOCON挑戦プロジェクト「ForteFibre」は、2006年に始動したプロジェクトです。私たちの最大の目標は、毎年開催される「NHK学生ロボコン」で優勝すること。これまでに通算16回、その全国大会に出場しています。部員は各学年

20名ほどで、機械工学課程、電子システム工学課程、情報工学課程の学生が中心です。そんな中でデザイン・建築学課程に所属する私がForteFibreに入部したのは、入学して何か新しいことを始めたいと考えた時、自分にとって最も遠い存在に思えた「ロボット」という未知の領域にあえて挑戦してみようと思ったのがきっかけでした。

プロジェクトの組織は、大きく「ソフト班」と「ハード班」に分かれています。ソフト班には、機体を制御するためのプログラムを書くメンバーと、電子回路を設計・作成するメンバーが所属。ハード班には、ロボット本体の設計・加工・組み立てを行うメンバーがいます。他には、チーム全体をマネジメントする「運営」という役割があり、私は

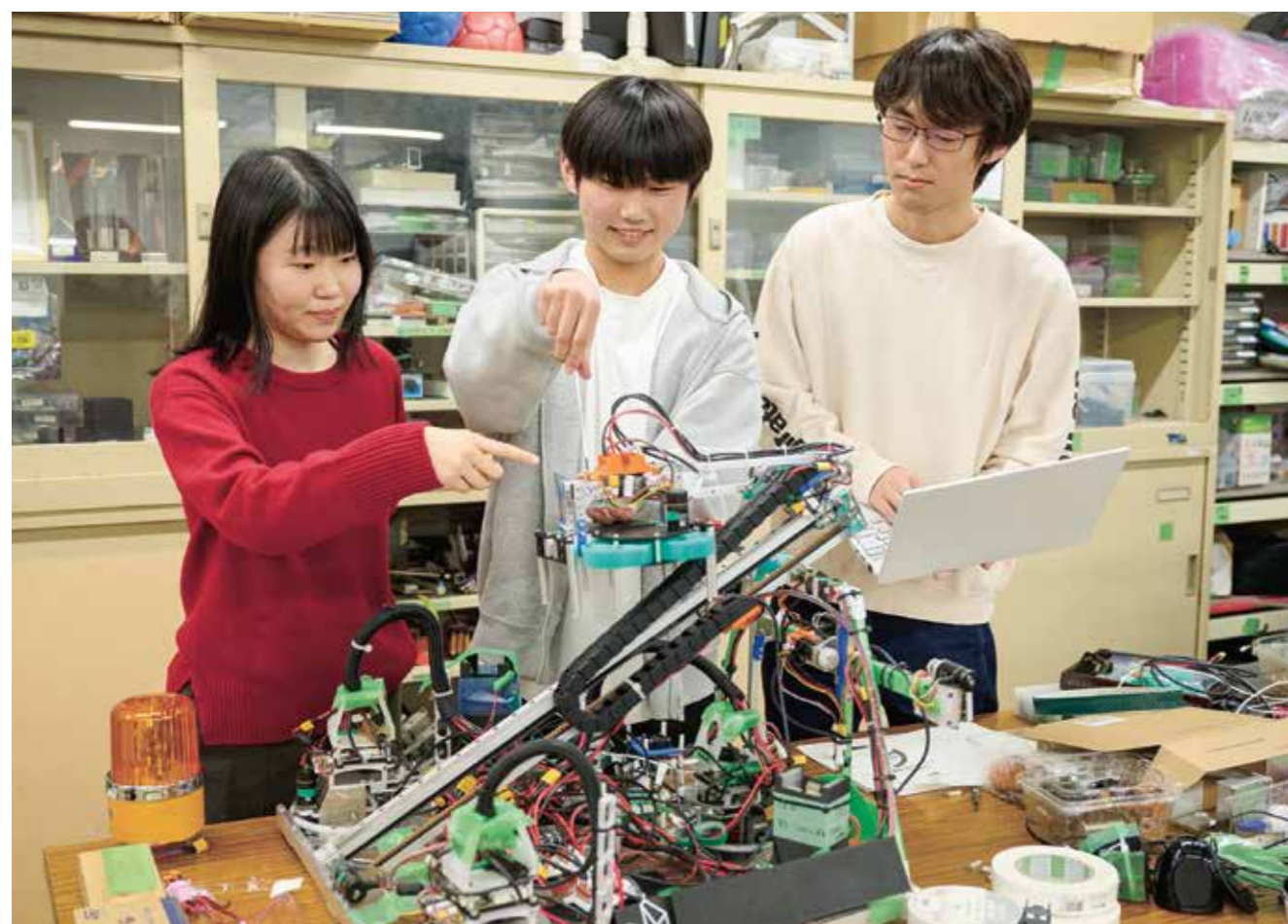


Fig.1 部室での活動風景

この業務を担当しています。

活動スケジュールとしては、1回生の6月頃までは部内で「新人戦」を開催し、白線の上を走るライトレース機や自作ハンドの製作に挑戦。その後は、9月頃に金沢工業大学のチームが主催する「SRC (Summer Robot Contest)」に出場し、3月頃の「関西春ロボコン」、8月頃の「関西夏ロボコン」と大会が続きます。そして最後が「NHK学生ロボコン」。8月下旬に翌年のルールが発表され、6月の本番に向けて約10カ月の戦いが始まります。

## 勝利を目指して試行錯誤する日々

NHK学生ロボコンのテーマは毎年大きく変わります。2024年は稲作、2025年はバスケットボール、そして2026年はカンフーを模した競技です。テーマが変われば、つくるロボットや考え方も変化します。例えば、近年は自動機が必要となる年が増えており、相手チームの戦略を考察した上で、それに対抗できる機体をつくるのが重要となっています。過去の機構を流用できる場面もありますが、基本的には一から新しく考えることが多いですね。ロボットに用いる部品の大部分は、学内の「オープンファシリティーセンターものづくりユニット」にある工作機械を駆使して、自分たちの手で加工しています。図面通りにできたパーツであっても、ほんのわずかな誤差が積み重なってうまく組み立てられなかったり、設計時には気付かなかった干渉があったりして、まさに試行錯誤の連続です。

運営として私が力を注いだのは、こうした状況も想定して、全体の進捗を管理すること。機体の出来上がりが遅れて練習時間が削られてしまうと、本来は見つけられたはずの問題点を見えなかったり、トラブル発生時の対応力が下がったりしてしまいます。だからこそ、私は「ある程度動く機体で、いかに多くの試行回数を稼げるか」を重視し、マネジメントを行ってきました。その過程では、苦渋の決断を迫られたことも。NHK学生ロボコンでは2月に第1次ビデオ審査があるので、その頃になっても目標とするレベルを達成できていない機構があり、「そろそろ方向性を絞らないと間に合わない。より成果が出ている別の機構に注力する必要がある」と投げ掛けたことがあります。個々のこだわりがあるからこそ、時には意見がぶつかることもあります。その中で、全員が納得できる妥協点を見つけ、チーム一丸となって進んでいけるように導く。そんな力が、この活動を通して大きく磨かれたと感じます。

## より強いチーム・組織を目指して

運営の役割はそれだけにとどまりません。部の



Fig.2 大会に向けてロボットを調整する様子



Fig.3 フルサイズのロボットを加工している様子

会計管理や、学生関係課の方との折衝、さらには活動を支えてくださるスポンサー様とのやり取りも重要な仕事です。ここ2〜3年は特に新規スポンサー獲得に力を入れており、自分たちから企業へプレゼンテーションに行き、支援をいただけるようアピールを重ねています。スポンサー様との関わりで大切にしているのは、長期的な関係を構築すること。部品を1回提供いただいて終わりではなく、その企業に新入生向けの講習会を開いていただくなど、その後も交流を続けることを重視してきました。また、支援がどのように成果に結び付いたかを明確にするため、大会成績や会計をまとめた報告書の提出に加え、実際に部品を使った様子をSNSやブログで発信するなど、スポンサー様への感謝と情報発信を常に意識しています。

その他、現在は部内での技術の継承にも力を入れています。NHK学生ロボコンは毎年ルールが変わることもあり、後輩への引き継ぎがうまくいっていないのが長年の課題でした。そこでここ数年は、新入生講習のための資料や、大会で開発したロボットの情報を残す取り組みを始めました。10世代先の後輩が読み返しても「あの時はこんな工夫をしていたんだ」と参考にできるようなライブラリの構築を目指しています。

チームとしての最終目標は「優勝」ですが、そこに至るにはまず「安定してベスト4に入れる実力を付けること」が必要です。その中期目標の実現に向けて、歴史の記録は欠かせないものだと考えています。さらに、今後はOB・OGの方々との関

係も強化し、誰もが気軽に疑問を投げ掛けられるチームになってほしいですね。そうした変化がForteFibreをより強くし、最終目標を実現に近づけてくれると思います。

## ROBOCON挑戦プロジェクトの魅力

このプロジェクトに参加していると、大会で他の大学や高等専門学校の方々と交流する機会が多くなります。そこで、チームの運営方法やロボットの制御方法、新しい技術などを取り入れることができ、アイデアの幅が大きく広がっていくのが楽しいですね。特に関西は「みんなで一緒に盛り上げていこう」という温かい空気感があります。

ForteFibreは新メンバーも募集中です。新しいことにチャレンジするのはハードルが高いと感じるかもしれませんが、ただ、参加してみると「意外と楽しい」と思うことが多いので、ロボコンでもそれ以外でも、ぜひ何かに挑戦してみてください。

Interviewee



東さくら  
—  
工芸科学部  
デザイン・建築学課程  
4年次

# プログラミングII

より効率よく、  
より賢く動作する  
プログラムを  
作成するために

梅原大祐 教授  
[情報工学・人間科学系]



## 【経歴】

1999年04月-  
京都大学 助手  
2007年04月-  
京都大学 助教  
2011年03月-  
京都工芸繊維大学 准教授  
2016年02月-  
京都工芸繊維大学 教授

## 【研究分野】

媒体共有型ネットワーク、通信路モデル化、  
変調・符号化方式、媒体アクセス制御方式、  
リソース制御方式

教育NOW

プログラミングII

## 【授業概要】

基本的なデータ構造とその操作法を習得し、  
プログラム開発の基本となる手法や考え方を  
身に付けることを目的とした講義です。  
扱う問題に適したデータ構造と  
アルゴリズムの選択法や設計法  
および時間計算量と領域計算量について  
学習します。

情報工学課程では1～3年次にかけて

プログラミングに関する豊富な講義や演習が展開されます。

今回紹介する「プログラミングII」もその一つ。

「賢いプログラムを書く」ための知識を養うこの授業について、  
指導を担当する梅原先生にお話を伺いました。

プログラムの処理速度を左右する

「データ構造」「探索アルゴリズム」

皆さんは、スマートフォンのアプリやウェブサー  
ビスを利用して、画面が固まったまま動か  
なかったり、処理に長い時間がかかったり  
して、利用をやめてしまった経験はない  
でしょうか。その原因は、もしかすると  
プログラムの効率性にあるかもしれません。  
情報工学課程の2年次を対象とした「  
プログラミングII」は、まさにその「  
効率」がキーワードとなる授業です。  
講義を担当する梅原大祐先生は、  
次のように話してくれました。「  
プログラミング」といって、多くの学生  
はまず「コードを書くこと」そのもの  
に目を向けがちですが、この授業では  
そこから一歩進んで、プログラムを「  
より効率よく、より賢く」動かすた  
めの考え方を学びます」

授業の核となるのは、「データ構造」と「  
探索アルゴリズム」という2つの概念  
です。データ構造とは、コンピュータ  
の中でデータをどのように整理し、扱  
うかという「データの入れ方・並べ方」  
のルールのこと。そして探索アルゴ  
リズムとは、多くのデータの中から目  
的の情報を見つけ出すための方法を指  
します。「授業では、データを順番  
に並べて扱う『配列』や、ポインタ  
(番地)を用いてデータ同士をつな  
いで管理する『連結リスト』、最後  
に入れたデータを最初に取り出す『  
スタック』、最初に入れたデータを  
最初に取り出す『キュー』、枝分か  
れる形でデータを管理する『木構造』  
などのデータ構造を教えます。また  
探索アルゴリズムについては、一つ  
ずつ順番に探す『線形探索』や、  
データを半分ずつ絞り込んで探す『  
二分探索』など代表的な手法への理  
解を深めてもらいます」

これらの知識の重要性について、梅  
原先生はこう語ります。「例えば研  
究室に入ると、シミュレーションを  
行うこともあるでしょう。そんな時  
に効率性の低いプログラムだと、小  
さいデータサイズの時は早く結果が  
出ても、大きくなると途端に計算が  
遅くなってしまいます。いきなり  
そうした状況に陥って困らないた  
めにも、目的に応じて正しいデー  
タ構造やアルゴリズムを使い分け  
る力、あらかじめ処理速度や計算  
量の『見積もり』ができる力を身  
に付けてほしいと考えています。  
この授業で、そのあたりの勘を磨  
いてもらいたいですね」

丁寧な解説で理解をサポート

授業では、抽象的な理論を具体的に  
イメージさせるための工夫が随所に  
凝らされています。例えば、目的の  
情報を見つけ出す探索アルゴリズム  
の解説では、次のような「数当て  
ゲーム」が例に挙げられます。

「誰かとペアを組んで、このゲー  
ムをやる場面を想像してください。  
相手の人が思い浮かべた1から100  
までのうち一つの整数を、なるべく  
少ない回数の質問で当てましょう。  
質問は『はい』『いいえ』で答え  
られるものに限ります」

この時、何回質問すれば正解を  
当てることができるでしょうか。先  
生は次のように解説します。「ま  
ず、1から順番に聞いていく方法  
(線形探索に近い考え方)では、最  
悪の場合100回の質問が必要で  
す。対して、データが順序通りに  
並んでいる場合に限りませんが、  
範囲を半分ずつに絞り込んでいく  
『二分探索』に近い考え方をう  
いければ、多くても7回の質問で  
必ず正解にたどり着くことができ  
ます。整列済みデータから値を探  
す場合、線形探索ではデータ数に  
比例して処理回数が増えますが、  
二分探索を使えば処理回数の増  
え方を大幅に抑えることができる  
のです。さらにデータ数を増やし  
たとしても、データ数が1000  
の場合で約10回、100万では約  
20回、10億でも約30回程度  
の比較で探索でき、処理回数は  
緩やかにしか増えません」。デー  
タ数が1000から10億と100  
万倍になっても処理回数が3倍  
程度で済むとは、まさに驚きで  
す。「半分にするを繰り返して計  
算量を削減するのは、情報科学の  
偉大な発明の一つです。このよう  
に、アルゴリズムの違いによって  
処理速度が大幅に変わると知  
ってもらい、効率的な設計につな  
げる力を育むことを大きな目標  
としています」

毎回出される小テスト課題を中心  
とした学習サイクルも、この授業  
の特徴です。課題の内容は、デー  
タ構造の図解や、あえて無限ル  
ープに陥るように作られた不完  
全なプログラムの修正などさま  
ざま。回答はオンラインで回収・  
採点され、学生たちは個々にフ  
ィードバックを受けることがで  
きます。典型的な誤答例は次の  
回で丁寧に説明がなされるなど  
、受講生が自身の理解状況を  
振り返りながら学習できる授  
業設計となっています。「なん  
となく分かったつもりになるの  
ではなく、自分の言葉



Fig.1——図解を交えて分かりやすく解説する梅原先生



Fig.2——演習問題を解く学生たち



Fig.3——教材の閲覧や課題の提出は学習管理システム上で完結

で、なぜこのデータ構造やアルゴ  
リズムを選んだのかを説明でき  
る。そのレベルの理解を目指し  
ています」

研究室や社会でも役立つ

「考える力」を磨く

この授業で培われる知識は、  
プログラミングという特定のスキ  
ルを超え、より普遍的な「問題  
解決力」へとつながっています。  
「研究室に入ると、①現状を調  
査し、②目的達成のために必要  
な方法を考え、③それを検証・  
改善し、④価値がある

成果を世の中に発信していく、  
というプロセスを経験します。社  
会に出ても、扱う問題の内容が  
変わるだけで、この進め方は  
変わりません。そうした課題  
解決力を研究室で磨いていく  
ための土台として、プログラ  
ミングIIの授業で得た『より  
よいプログラム、よりよい方法  
を考える力』が役に立つはず  
です」

また、近年の技術環境の変化  
も踏まえて、先生はこうも話  
してくれました。「生成AIの  
技術が発展し、プログラムの  
コードも書いてくれるようにな  
りました。しかし、AIが提示  
したコードが最適とは限り  
ません。自分の考えをコード  
に置き換える作業

はAIが助けてくれますが、最  
最終的に良し悪しを判断する  
力が人間には必要であり、そ  
のためには知識が不可欠なの  
です」

最後に、梅原先生は学生に  
向けて次のようなメッセージ  
を寄せてくれました。「デー  
タ構造やアルゴリズムは、初  
めは難しく感じるかもしれ  
ません。しかし、理解が進む  
につれて、同じ問題でも解  
き方によって大きく効率  
が変わる面白さを実感でき  
るはず。プログラミングを単  
なる作業としてではなく、  
一生ものの『考える力』  
として身に付けたい。そんな  
意欲を持つ皆さんと、授  
業で向き合えるのを楽しみに  
しています」

# 物質分析学 研究室

## 細胞内の環境を 量子センサで計測し 生命の謎に迫る

外間進悟 助教  
[分子化学系]



【経歴】

2015年04月-  
京都大学 工学研究科 博士研究員  
2016年04月-  
中央研究院 原子分子科学研究所 博士研究員  
2018年04月-  
大阪大学 蛋白質研究所 学振特別研究員SPD  
2020年06月-  
大阪大学 蛋白質研究所 助教  
2023年04月-  
京都工芸繊維大学 助教

【研究分野】

量子センサ, 温度生物学, 蛍光イメージング,  
材料科学, ポリマー

研究室探訪

物質分析学研究室

【研究概要】

細胞の中の分子や物理化学量（温度やpHなど）は生命現象に重要な役割を果たします。さまざまなナノ材料（ダイヤモンド、量子ドット、金など）と光計測技術を組み合わせることで、目には見えない分子や物理化学量を可視化・計測する技術を開発しています。

生命の最小単位である細胞。  
その内部にも私たちの世界と同様に温度などの「環境」が存在します。  
極めて微小な世界におけるそうした環境の変化が、  
生命現象にどのような影響を与えているのか。  
ナノ材料を用いて生命の神秘に挑む、外間先生の研究を紹介します。

### 生命科学×有機化学 細胞内の環境をナノ材料で計測

「もともと私は、化学の立場から生命現象を理解したいという思いを持って研究をしてきました」。そう語るのは、物質分析学研究室の外間進悟先生。大学時代は有機合成化学を専攻し、大学院で生命科学と有機化学を融合させたテーマにチャレンジ。そこでの経験が今の研究につながっていると語ります。

具体的な研究内容について、先生は次のように説明してくれました。「ナノメートルサイズの炭素のナノ材料を使って、細胞の内部で起こっている現象を『その場で』また『できるだけ壊さずに』計測する技術の開発に取り組んでいます。特に、蛍光性ナノダイヤモンドやカーボン量子ドットといった『量子センサ』とも呼ばれる発光性ナノ材料を利用して、細胞内の温度や周囲の環境変化を高精度に読み取る技術を開発することを目指しています」。量子センサとは、いったいどのようなものなのでしょうか。「量子センサとは、材料の中に閉じ込められた電子スピンの状態を利用したセンサです。スピンのエネルギー状態は離散的、つまり飛び飛びの値を持っていて、それが周囲の温度変化などに応じて敏感に変化します。そこに光を当ててエネルギー遷移を観察することで、周囲の環境情報を高感度に検出できるという仕組みです」

高度な技術を駆使して、細胞の内部を詳細に可視化しようとする外間先生。研究の原動力について次のように語ります。「細胞の中ではさまざまな生命現象が起こっていますが、それらはこれまでDNAやタンパク質などの『生体分子』によって営まれていると考えられてきました。一方で近年、温度や粘性、pHなどの物理的な微小環境の変化が生命現象に関与していることが指摘されています。しかし、細胞の中は非常に小さく複雑なため、従来の方法では局所的な変化を十分に捉えることが困難でした。こうした微小な変化の計測を可能にし、生命現象への理解を深めることが私の大きな目的です」

### 正確な計測を実現するために

外間先生がまず取り組んだのは、蛍光性ナノ

ダイヤモンドという材料の可能性を最大限に引き出すことでした。「蛍光性ナノダイヤモンドは大学院時代に出会った材料です。量子状態を利用して温度などを測れるユニークな材料で、大きな魅力を感じていました。この材料を使って実現したセンサの一つが、細胞内の温度を1度の精度で計測できるナノ温度計です。開発にあたっては、細胞内が塩やタンパク質など多様な成分が存在する複雑な環境であることから、センサの応答が温度以外の要因にも影響されやすいという課題がありました。そこで、材料の表面を化学修飾したり、計測方法を工夫したりすることで、温度の変化だけを正確に捉える性質を向上させ、信頼性の高い計測を可能にしました」

こうした工夫の積み重ねによって、ある画期的な知見が得られました。それは、これまで計測が困難だった細胞内の熱伝導率に関する発見です。「これまで、細胞内の熱の伝わりやすさ（熱伝導率）は、成分のほとんどを占める水と同等であると考えられてきました。しかし、私たちが開発したナノ温度計を使って計測したところ、驚くべきことに、細胞内の熱伝導率は水の約6分の1程度しかないことが判明したのです」。この事実は、細胞内の特定の場所で発生した熱が、周囲に拡散しにくいことを意味しています。実際に、細胞のエネルギー工場であるミトコンドリアの周辺は、局所的に50度前後の高温になっている可能性も過去の研究では示唆されているそうです。「理論計算では、細胞内における温度の上昇幅は $10^{-5}$ ケルビン（0.00001度）程度であると言われてきました。しかし、実際の値との間には明確なギャップがある。精度の高い計測によってこのギャップを埋め、細胞内の熱拡散のメカニズムをより深く知ることが、生命の駆動原理の理解につながるはずです」

また、大阪大学との共同研究では、幹細胞が神経へと分化する過程で温度が上昇することも突き止めたそう。局所的に温度を変化させることで細胞分化を促進できること、つまり温度によって生命現象が変化し得る可能性が明らかになりつつあるようです。

最近では、異なる性質を持つナノ材料を組み合わせたハイブリッドセンサの構築にも力を入れていると語ります。「蛍光性ナノダイヤモンドは、粒子一つだけで温度を計測できるのが大きな利



Fig.1 学生と実験操作の確認



Fig.2 ナノ粒子合成の様子。日々、精密な実験条件の検討を重ねている



Fig.3 作製したナノ粒子を細胞培養液に添加する様子

点です。極めて高い空間分解能で局所的な情報を得ることができます。一方で、それだけでは細胞全体の様子を把握するのは難しい。そこを補完するのが、カーボン量子ドットです。非常に小さく細胞全体に広がってくれるため、局所と全体の両面をカバーする計測が可能になります。この組み合わせにより、従来よりも多機能で高感度な計測につながる成果が得られています」

まだまだ、これで終わりではありません。先生はこう続けます。「最新の研究では、六方晶窒化ホウ素という材料を用いた量子センサの開発に取り組んでいます。層状構造を持つこの素材は、より

薄く、より小型なセンサとしての可能性を秘めています。細胞内で機能させることにも成功しており、その成果は国際的な学術誌『Nano Letters』にも掲載されました」。新しい材料や計測法を追究し続ける先生と学生たちの研究は、学術界にも大きな影響を与えています。

### 社会への貢献が第一の使命

外間先生が目指すのは、単なる計測技術の向上にとどまりません。「見えなかったものが見えるようになる」という純粋な面白さを糧にしなが

の先にある社会貢献を見据えています。「今後は、細胞内の温度だけでなく粘性や化学状態など、複数の情報を同時に、統合的に捉えられる計測技術を確立したいと考えています。細胞内の環境を多面的に理解することで、再生医療の現場で細胞の分化を高度に制御するなど、医療・創薬に貢献できる技術を生み出すこと。それこそが、科学者としての私の使命だと思っています」

「百聞は一見にしかず」。ナノ材料を武器に細胞内の現象を一つずつ丁寧に可視化していく外間先生の挑戦は、生命科学の未来を支える確かな基盤を築こうとしています。

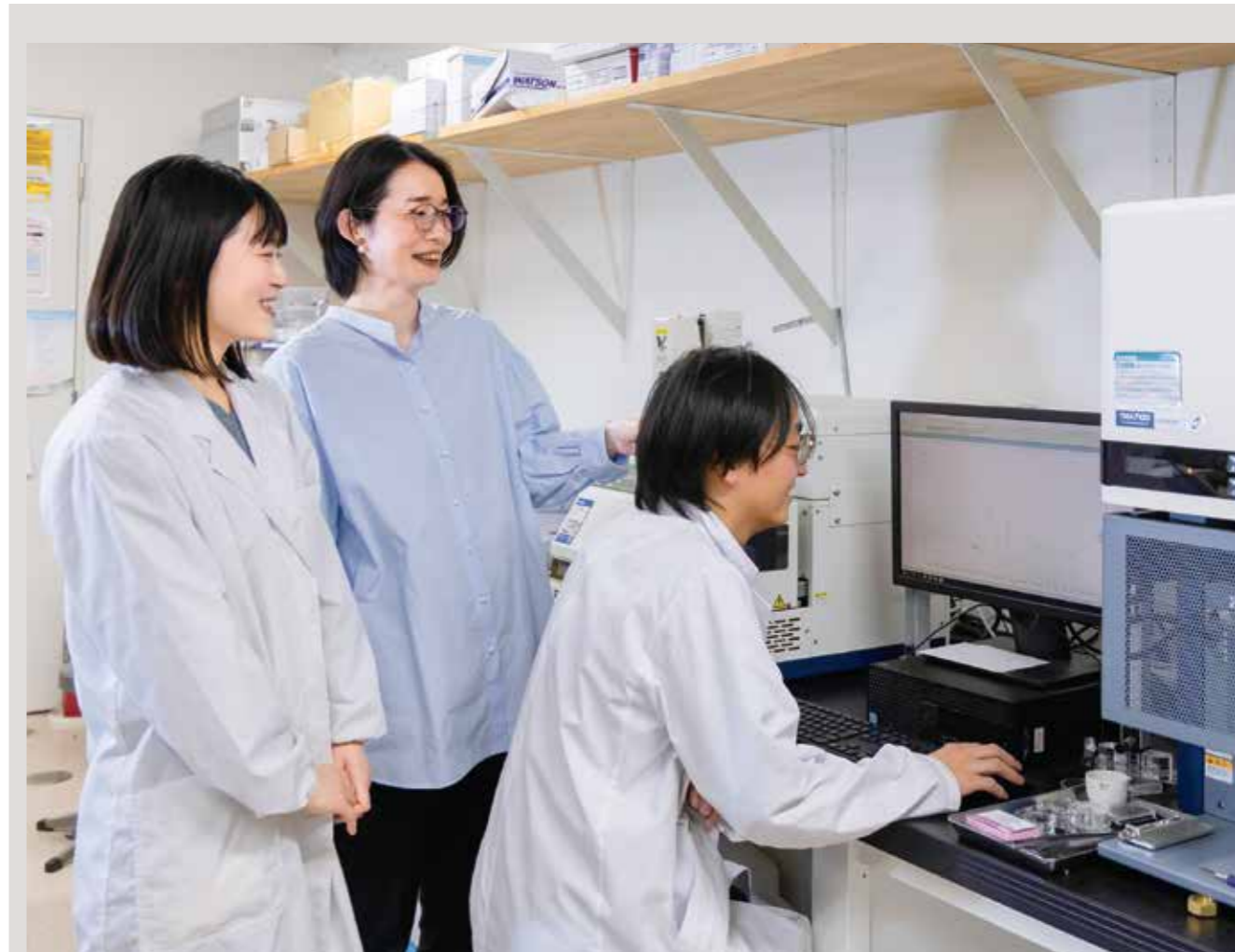


Fig.1——研究室での活動の様子。製造したナノファイバーの特性解析を行う



Fig.2——フィロインナノファイバー原料となるさまざまな種類の繭。嵯峨キャンパスから提供を受けている

Fig.3——ナノファイバー原料の電子顕微鏡観察

## 美しい光沢や優れた機能性を有し

「繊維の女王」とも呼ばれて人々に愛されてきたシルク。京都工芸繊維大学とつながりの深いこの素材に着目し、ヘルスケア分野などへの応用を目指している岡久先生に研究のストーリーやこれまでの成果について伺いました。

### 植物から動物へ 未知なる領域への挑戦

京都蚕業講習所を前身校の一つとし、古くから繊維分野に強みを持つ京都工芸繊維大学。伝統を守りつつも、繊維の新たな可能性を開く最先端の研究が展開されています。その舞台の一つが、岡久陽子先生の「バイオ機能材料研究室」です。研究室を訪ねると、先生はご自身の研究についてこう語ってくれました。「私の研究の原点は、学生時代の竹の研究にあります。竹材の生物劣化（カビ、虫害、腐朽などが原因で木材・竹材が劣化すること）をテーマに博士号を取り、その後は竹やアブラヤシなどの植物バイオマスを対象に、持続可能な材料の開発に取り組んできました。特に、植物から得られるセルロースをナノサイズまで細かくした『セルロースナノファイバー（CNF）』の製造や、その機能を生かした材料づくりを行ってきたことが、今の私の基盤となっています」

植物素材のエキスパートとしてキャリアを積んできた岡久先生。そんな先生が本学に着任して間もない頃、京都府北部の企業の方から「シルクをナノサイズまで細かくできないか」という相談を受けたことが、大きな転換点となったそうです。「それまで扱ってきたのは多糖類であるセルロースですが、シルクの主成分であるフィロインはタンパク質です。構造が異なるため、同じ方法でのナノ化は難しいのではないかと考えました。でも『まずは実物を見てみよう』と思い、提供いただいた原料で基礎的な検討をスタート。本学にはカイコやシルクを専門とする先生方が多くおられるので、基礎知識やこれまでの研究の流れを教えてくださいました。同時に過去の文献も調べていく中で、『植物繊維と異なる点だけでなく、ナノファイバー化という観点では共通する部分もあるのでは』と考えるように。そこで、これまでのCNF製造で用いてきた『前処理（原料を効率よく解繊するための処理）を施した後に機械的に解繊する（繊維の束を、グラインダーで細かくほぐす）』という基本的な考え方を応用し、前処理だけをシルクに適した方法に調整して研究を進めました。その結果、直径150ナノメートルを切る『フィロインナノファイバー（FNF）』を作り出すことに成功したんです。植物の研究で培った知見が、本

学ならではの素材であるシルクと結び付いた瞬間でした」

### フィロインナノファイバーが持つ 驚きの性質と大きな可能性

そうして生み出されたFNFには、従来のシルク材料とは異なる優れた性質があるそうです。先生は次のように説明してくれました。「FNFの大きな特徴として、水中で均一に分散する性質があります。そのため、親水性高分子材料と均一に混ぜることができ、相手となる材料の弱点を補うことが可能です。例えば、創傷被覆の効果がある『キトサン』という素材がありますが、単体では材料としての安定性が不十分でした。ところが、ここにFNFを混ぜると形態安定性を高められることが分かりました。特別な化学反応を必要とせず、混ぜるだけで材料を補強できる性質は、シンプルな工程で機能性を高められるため、大きな可能性を秘めています」

安全性の高さも大きな強みである、と先生は続けます。「有機溶媒を使わずに水だけで製造できるため、安全性が非常に高く、シルク本来の生体親和性をそのまま生かせる点も大きなメリットです。人の体にやさしい材料として、ヘルスケア分野での利用が期待されます」

そしてもう一つ、先生はこう話します。「FNFには優れた乳化性能があることも明らかになりました。乳化剤は、化粧品や食品の製造に欠かせないもの。石油由来材料に代わる、安全性の高いバイオベース材料として、社会実装を目指して研究を進めていきます」

岡久先生の研究室では、生き生きと活動する学生たちの姿も印象的でした。そんな学生たちに対する思いについて、先生は次のように語ります。「最初は私が大枠のテーマを提示しますが、研究を進める中で『実際に手を動かしている本人にしか分からない気付き』が必ず生まれてきます。その気付きを大切にしながら、学生自身が考えて研究の方向性を定め、最終的には『これは自分の研究テーマだ』と胸を張って言えるところまで到達してほしいと考えています。学生時代は、自由な発想で時間を使いながら研究に打ち込める贅沢な時期です。思い通りにいかないことも多いですが、基本は『ワクワクするもの』であってほ

# バイオ機能材料 研究室

## 天然素材の力を 最大限に生かした 材料開発を



岡久陽子 教授  
【繊維学系】

【経歴】  
2007年04月-  
京都大学 研究員（科学技術振興）  
2008年04月-  
（独）日本学術振興会 特別研究員PD  
2012年05月-  
（独）日本学術振興会 海外特別研究員  
2014年10月-  
（独）日本学術振興会 特別研究員RPD  
2016年03月-  
京都工芸繊維大学 助教  
2021年03月-  
京都工芸繊維大学 准教授  
2026年04月-  
京都工芸繊維大学 教授

【研究分野】  
竹、セルロースナノファイバー、  
フィロインナノファイバー、複合材料

研究室探訪

バイオ機能材料  
研究室

【研究概要】  
植物繊維や動物繊維を由来とする多糖やタンパク質を原料に、機械解繊手法を用いることで、高性能ナノファイバーの製造を行っています。

しい。私自身も、昔所属していた研究室のボスからよく『ワクワクしていますか?』と聞かれていました。学生たちにも、困難を楽しむくらいの気持ちで、研究の面白さを存分に味わってほしいと願っています」

### 根底にあるのは「自然への敬意」

「より良い性能の材料を作る」という目標を持ちながらも、岡久先生の視点は常に、素材を生み出した「自然」そのものに向けられています。最

後に語ってくれたのは、先生の研究の核となる哲学でした。「私の研究の根底には『自然が作り出したものを、できるだけ壊さずに生かす』という考えがあります。植物繊維のセルロースも、動物繊維のシルクフィロインも、いずれも人の力だけでは到底生み出せないような、とても優れた構造や性能を持っているんです。天然素材に向き合うたびに、その完成度の高さに驚かされますし、自然への敬意を感じます。だからこそ、それらの素材を無理に作り変えるのではなく、本来の構造や性質をできるだけ生かしながら材料として利用する

方法を常に考えています。その過程で自然の仕組みへの理解が深まっていく点も、この研究の醍醐味です。自然が長い時間をかけて生み出してきた素材に学びながら、それを社会に役立つ形へとつなげていく。その積み重ねが、持続可能な材料開発に結び付くと信じて研究を続けています」  
シルク分野ではまだまだ新参者、と謙虚に語る岡久先生。京都工芸繊維大学が紡いできた繊維の研究の歴史に、新たにどのような1ページが刻まれるのか。今後の展開にも期待が高まります。

**がんばる工機大生 | Active KIT students**

# 令和7年度 学生の表彰

本学では、学会での受賞など学術研究活動において優秀な成績を収めた学生や、課外活動および社会活動などで活躍した学生を対象に学生表彰を実施しています。

※学年は表彰当時のものを記載しています。

## 学業成績優秀者

令和7年度卒業者のうち、学業において、特に優秀な成績を修めたと認められる者

所属	氏名	所属	氏名	所属	氏名
応用生物学課程 4年	上村 菜七	応用化学課程 4年	山本 くるみ	機械工学課程 4年	野村 快生
応用化学課程 4年	堂脇 雄飛	電子システム工学課程 4年	村上 優孝	デザイン・建築学課程 4年	森田 瑞生
応用化学課程 4年	谷川 創史	情報工学課程 4年	吉本 啓太郎	デザイン・建築学課程 4年	守永 笑真

## 研究業績優秀者

令和7年度修了者のうち、学術研究活動において、特に顕著な業績を挙げ、かつ、学界または社会的に高い評価を受けたと認められる者

所属	氏名	主な研究テーマ
博士前期課程 応用生物学専攻 2年	畑中 涼	・赤痢アメラバ由来APS kinaseの分子構造に基づく機能的特徴づけ
博士前期課程 材料創製化学専攻 2年	永田 周慈	・カーボンナノチューブとトリプチセン誘導体とのハイブリッド系の構造安定性に関する理論的研究
博士前期課程 材料制御化学専攻 2年	桂 章皓	・異種材料界面の精密設計による高性能・高信頼性半導体デバイスの開発
博士前期課程 物質合成化学専攻 2年	武内 仁志朗	・かご型シルセスキオキサンを基盤としたビスウレア超分子材料の自己組織化制御と機能創発
博士前期課程 機能物質化学専攻 2年	下村 鈴音	・電子線照射および表面化学修飾による六方晶窒化ホウ素ナノ粒子の機能化と細胞計測への応用
博士前期課程 電子システム工学専攻 2年	小川 瑛仁	・非中性電子プラズマの混合過程における反対称温度が誘起する渦間距離振動の実験的検証
博士前期課程 情報工学専攻 2年	菅原 瑠斗	・スタイル変換を用いたバッチ重み付け型TransformerによるImage Outpainting
博士前期課程 機械物理学専攻 2年	小林 玄征	・外力付加による溶断現象のメカニズム解明に向けたphase-field複数物理モデルの開発
博士前期課程 機械設計学専攻 2年	石山 満喜	・二波長位相回復ホログラフィック顕微鏡を用いたマイクロチャネル流れにおける液体プラグ体積計測
博士前期課程 建築学専攻 2年	飯田 雅	・つなく境界ー境界が錯綜する建築にみる、新たな風景の構築
博士前期課程 バイオベースマテリアル学専攻 2年	辻 七奈	・表面構造解析によるポリブチレンサクシネートアジペート薄膜の海洋生分解メカニズムの解明
博士後期課程 物質・材料化学専攻 3年	菊池 一槇	・Creation of Functional Supramolecular Architectures Based on Organoarsenic Complexes
博士後期課程 電子システム工学専攻 3年	中島 隆一	・用途に応じた耐放射線性回路設計と医療用炭素線を用いた中性子起因ソフトウェア評価手法
博士後期課程 設計工学専攻 3年	山村 彩乃	・凝固組織の高精度予測に向けたphase-fieldデータ同化システム開発に関する研究

## 学術研究活動

令和7年における学術研究活動において、国際的または全国的規模の学会から賞を受けた場合、社会的に高い評価を受けた場合等、特に顕著な業績を挙げたと認められる者

所属	氏名	受賞理由
博士前期課程 材料創製化学専攻 2年	山崎 生真	国際学術誌 Journal of the Optical Society of America B 他2本 論文掲載 ／日本光学会年次学術講演会Optics & Photonics Japan 2025 口頭発表／北陸ヤーンフェア2025 発表
博士前期課程 物質合成化学専攻 2年	江口 優人	国際学術誌 Journal of Molecular Liquids 他2本 論文掲載／2025 年度日本液晶学会討論会 学生ポスター発表賞
博士前期課程 物質合成化学専攻 2年	大河内 千紜	国際学術誌 Asian Journal of Organic Chemistry 他4本 論文掲載 ／Pacifichem 2025 ポスター発表／国内学会発表 4件
博士前期課程 物質合成化学専攻 2年	北岡 勇人	国際学術誌 New Journal of Chemistry 他1本 論文掲載 ／12th East Asia Symposium on Functional Dyes & Advanced Materials Poster Award
博士前期課程 物質合成化学専攻 2年	長嶋 夏秋	国際学術誌 Macromolecular Chemistry and Physics 他1本 論文掲載 ／Pacifichem 2025 ポスター発表／国内学会発表 9件
博士前期課程 物質合成化学専攻 1年	天野 蒼太	国際学術誌 Chemical Communications 論文掲載 (Front Cover採択)／国際学会発表 2件／国内学会発表 4件
博士前期課程 機能物質化学専攻 2年	小川 桐佳	化学工学会 第56回秋季大会 バイオ部門優秀ポスター賞 第15回CSJ化学フェスタ2025 優秀ポスター発表賞／Pacifichem 2025 ポスター発表 ／国内学会発表 3件 他
博士前期課程 機能物質化学専攻 2年	白矢 昂汰	国際学術誌 Carbon 論文掲載／NDNC2025 ポスター賞／日本分析化学会第74年会 ポスター賞 他 日本分析化学会 第19回近畿支部夏季セミナー 優秀ポスター発表賞 ／日本腐植物質学会 第41 回講演会 ポスター賞
博士前期課程 機能物質化学専攻 2年	原 夏凧	
博士前期課程 電子システム工学専攻 2年	清家 一朗	国際学術誌 Applied Physics Express 他1本 論文掲載／国際学会発表 1件／国内学会発表 7件 他 IEEE International System-on-Chip Conference (SOCC) 2025 Student paper contest First place ／LSIとシステムのワークショップ2025 優秀ポスター賞 (学生部門)／AIと半導体講座第9回演習 優秀賞
博士前期課程 電子システム工学専攻 1年	Liang Zhipeng	8th International Workshop on Ultra-Wide Bandgap Materials and Devices Best Student Presentation Award ／国際学会発表 1件／国内学会発表 1件 他
博士前期課程 電子システム工学専攻 1年	西岡 大稀	IEEE International Future Energy Electronics Conference (IFEEC) 2025 Best Paper Award ／Workshop on Synthesis and System Integration of Mixed Information Technologies (SASIMl) 2025 Best Paper Award 他
博士前期課程 情報工学専攻専攻 2年	廣澤 凜太郎	Advanced Data Mining and Applications Best Student Paper Award ／国際学会発表 2件／国内学会発表 3件
博士後期課程 物質・材料化学専攻 2年	吉田 和紜	国際学術誌 Advanced Materials Technologies 論文掲載 ／第52回炭素材料学会年会 ポスター賞／令和8年度日本学術振興会特別研究員DC2採用候補者に内定
博士後期課程 物質・材料化学専攻 1年	西口 直輝	第15回CSJ化学フェスタ2025 ポスター賞 ／2025 博士キャリアメッセ KYOTO「三洋化成賞」／NARA 企業賞「三洋化学賞」 他

## 社会活動

令和7年における社会活動において、社会的に高い評価を受け、かつ、本学の名誉を著しく高めたと認められる者

団体名	受賞理由
科学・ものづくり教育普及プロジェクト「ほっけ」	各種学校や児童館、イベント等におけるものづくり教室、出前事業の実施 (18件)
キャンパスからの脱炭素プロジェクト "KIT環境サークル「あーす」"	学内におけるウォータースタンド、不要傘のシェアステーションの設置 ／繊維リサイクルを目的とした古着回収・配布イベントの開催／京都市立八瀬小学校における出前授業の実施 ／株式会社ミツカンと連携したフードロス削減に関するイベントの実施／令和7年度課外活動団体奨励金授与

**活躍する卒業生 | Active graduates**

## 佐藤 駿 | さとう・しゅん |

株式会社 LIXIL LWT Japan 水栓事業部 水栓開発部 商品開発5G



佐藤 駿

2012年度  
大学院工芸科学研究科  
博士前期課程  
先端ファイプロ科学専攻 修了



Fig.1——— 工作中的佐藤さん



Fig.2——— 学位記授与式にて、研究室の指導教員およびメンバーと

### 大学時代の思い出、今役に立っている経験

中高生の頃から「将来はモノづくりに関わる仕事がしたい」と漠然と思い描いていました。さまざまな大学を見学する中で、理系教育に定評があり、メーカー系企業で活躍する先輩が数多くいる本学に惹かれました。「ここなら多様な選択肢が得られ、自分の行きたい企業にきつと出える」と考え、入学を決めました。

学部から大学院へと進むなかでは、「繊維強化プラスチックの耐久性」をテーマとした研究に打ち込みました。研究室の先生方は非常に親身で、研究の基本から丁寧に指導してくださり、些細な疑問や相談にもじっくり向き合ってくださいました。また、企業の方や社会人ドクターの方々も在籍しており、「研究が社会でどう活かされるのか」「実社会で利益を生み出すにはどうすべきか」といった視点を学生時代から学べたことは大きな財産です。そして、仲間と時間を忘れて実験や論文執筆に没頭した日々は、最高に充実した思い出です。

国内外の学会にも数多く参加させていただきました。大きな舞台上で発表し、専門家からの鋭い指摘や質問に論理的に答える訓練を積んだ経験は、現在の仕事における会議やレビューの場でも生きています。とくに国際学会に参加し、英語での論文作成から発表までをやり遂げたことは大きな自信につながりました。さらに、韓国のヨンナム大学での1カ月間の短期留学では、海外生活を体験するとともに、現地の学生の研究に対する熱量を肌で感じる事ができ、視野が大きく広がりました。本学は、先生方のサポートのもと、自ら望めばいくらでも挑戦の場を与えてくれる環境です。ここで培った経験と学びが、今の私のキャリアを力強く支えてくれていると感じます。

### 現在の仕事内容と大学で学んだことの関係

現在は、水栓（蛇口）やシャワーヘッドの開発に携わっています。昔から思い描いていた「モノづくり」ができること、そして大学で学んだ金属や樹脂の知識が生かせると考えて入社しました。

実際の業務において、大学での学びが生きていると感じる場面は多々あります。水栓は金属と樹脂の両方を使用し、常に強度や耐久性が課題となるため、機械工学や力学、プラスチックを研究した経験がそのまま生きています。また、学生時代の実験で培ったモノを扱うスキルや、学会発表で鍛えた「論理的に考える力」「伝える力」も、日々の開発業務の確かな土台となっています。大きなやりかいは、やはり開発した製品がお客様の手に渡り、「いいね」と喜んでいただけたときです。自分が手掛けた製品が世の中に出ていく達成感はもちろん、水栓という身近な製品だからこそ、滞在先のホテルなどで偶然見かけることも多く、そのたびに嬉しい気持ちになります。こうした喜びを味わえるのは、モノづくりに携わる仕事の特権だと感じています。

### 進学希望者、後輩へのメッセージ

大学での勉強や研究はもちろん大切ですが、「社会で生きていくための土台作り」だと考えてみてはいかがでしょうか。実践的なスキルの多くは、社会に出てからさらに膨大に学ぶことになりますが、だからこそ学生時代に土台を作っておくことが必ず生きてくると思います。

また、学生時代は友達と過ごす時間も存分に大切にしてください。私には今でも定期的に集まっては思い出話に花を咲かせる一生の仲間がいます。大変だった研究室での日々もかけがえない宝物です。今でもたまに先生方を訪ねて近況報告をすると、とても喜んでくださり、それが私自身の嬉しさにもつながっています。

今、具体的な将来像がなくても焦る必要はないと思います。振り返ってみると、私自身、大学選びや就職活動の時期はまだ目標が漠然としていました。「自分の選択肢を広げるため」に進学し、結果的にそこで得られた多くの選択肢があったからこそ、「研究が生かせそう」と納得できる就職先を選ぶことができました。本学は、望めばいくらでも挑戦でき、先生方もサポートしてくれています。大学時代に頑張ったという「自信」が、今の私を支えてくれていると感じます。皆さんの挑戦を心から応援しています。

プラスチックの研究で得た専門知識や学会発表の経験など、すべての学びが現在のキャリアに直結している。

# 金野弘の観光ポスターについて

美術工芸資料館 技術補佐員 中川可奈子

美術工芸資料館の収蔵品には、作家自身の厚意により寄贈された貴重な資料も多く含まれている。

金野弘（1915・1985）は秋田県に生まれ、京都工芸繊維大学の前身校のひとつである京都高等工芸学校図案科を1938年に卒業後、大阪高島屋宣伝部にて活躍する一方で、国鉄（大阪鉄道管理局）や関西汽船などのために、長年にわたり観光ポスターを制作したグラフィックデザイナーである。1967年から1975年まで京都工芸繊維大学工芸学部意匠工芸学科で非常勤講師を務め、1983年には自作ポスター約200点を美術工芸資料館に寄贈している。今回は、展覧会「旅するところをのせた金野弘の観光ポスター」（会期：2026年6月1日～7月11日）の開催にあわせて、これらの資料を紹介したい。

金野弘が学生の頃、学校正門前に古本屋「ワキヤ書房」が移転してきた。店主の脇清吉（1902・1966）は、「プレスアルト研究会」を創設し、広告印刷物の実物を収録した解説冊子『プレスアルト』を1937年より刊行した。この冊子には、印刷物の批評や解説に加えて、デザイナー名や印刷技法、用紙、印刷所といった詳細な情報が記載されており、当時のデザイナーや印刷文化を知ることができると重要な資料となっている。当時、京都高等工芸学校の教授であった本野精吾（1882・1944）や霜鳥之彦（1884・1982）、向井寛三郎（1889・1958）も顧問として批評や執筆を行っていた。学生であった金野弘もまた、素朴で飾らない風情のようなものに惹かれて、この古本屋に通ったそうだ。

『プレスアルト』第13集（1938年1月）には、1937年12月にプレスアルト研究会主催で開催された「京都高等工芸学生が創る多く、事前に座席を予約できるサービス「発車着席券」の発売開始を告知するポスター（図6）や時刻改正に合わせて発行された「ダイヤル特急」あさしお」のポスター（図7）など、鉄道に関するポスターも見られる。関西汽船のために制作されたポスター（図8）では、温泉につかりながら船旅を思い浮かべる人物が描かれており、ポスターの前に立つ人々は、そこから新たな旅へと思いを巡らせたのではないだろうか。長年にわたる国鉄観光ポスター制作に対して、1970年に大阪広告協会サントリイ奨励賞を受賞した。また1979年にはデザイン功労により大阪府知事賞を、1980年にはデザイン文化功労により大阪市民

小型印刷物創作図案展を中心に商美を聞く座談会」の様子が掲載されている。この場で、大阪高島屋宣伝部に在籍していた今竹七郎（1905・2000）や太湖汽船会社の金井利夫から才能を高く評価された金野弘は、今竹七郎と脇清吉の推薦により「プレスアルト」第25集（1939年3月）の編集を担当した。その後も冊子の表紙デザインや自身の手がけた印刷物の提供などを行い、その関係は継続していった。

1941年に大阪高島屋宣伝部へ入社し、1978年まで同社の商業デザインに携わった（1946年以降は嘱託）。1952年に誕生した高島屋初代「薔薇の包装紙」は金野弘によるデザインである。同社での活動により、1957年にポスター広告電通賞、1960年に朝日広告賞百貨店部門賞を受賞した。また1951年より日本宣伝美術会（日宣美）の創立会員、審査員としても活動したほか、1963年には「H・KONNOデザイン室」を開業し、フリーランスデザイナーとして活躍の場を広げた。

そんな金野弘の仕事を語るうえで欠かせないのが観光ポスターである。日本国有鉄道と日本観光協会共催の観光ポスターコンクール入賞をきっかけに、1954年から国鉄（大阪鉄道管理局）のポスター制作を依頼されるようになった。当時の国鉄ポスターは、公共的な情報伝達を目的とした掲示物であり、毛筆による楷書体の文字が黒、赤、青などの色で1色刷りや2色刷りによって印刷された簡素なものであった。こうした状況のなかで、金野弘は国鉄ポスターの新しいあり方を検討する必要があると考えた。まず、デザイン上の工夫が試みられた。1955年に発行された大阪鉄道管理局のポスター（「まずまず便利になった北陸観光準急ゆのくに号」（図1））には、運行情報が明示されるとともに、温泉マークの付いた

表彰をそれぞれ受賞している。

金野弘は京都高等工芸学校でデザインを学び、印刷物の奥深さや魅力に触れた人物である。松ヶ崎時代には仲間にもまれながら、童顔に丸眼鏡をかけアコーディオンを弾いていたことや、デザイナーとして活躍後も本とおもちゃに囲まれた部屋の片隅で制作に取り組んでいたことなどが伝えられている。こうしたエピソードからは、彼の温かく遊び心に満ちた人柄がうかがえる。

金野弘の観光ポスターは単なる情報伝達にとどまらず、「旅するところ」をのせ、人々を旅へと誘う存在であったといえる。ぜひ、この機会

を抱を持ち、嬉しそうな表情を浮かべたキャラクターが描かれている。赤と黒の2色刷りでありながら、現代的な文字とイラストレーションによって、視覚的なわかりやすさに加えて親しみやすさを持たせている。

さらに金野弘は、国鉄ポスターのあり方について次のように述べている。「業務上の機能をはたしながらさらに加えて何かを強く訴える手段を考えなければならぬ」と思われた。なにを加えるかというところは「旅情」ではないかと考えた。人を旅に誘いだす情緒のようなものを画面に参加させることが、業務一点ばりの味けない国鉄のポスターに新しい風を吹きこむことになるのではないだろうか。（金野弘「国鉄のポスター」『デザイン理論』13号、意匠学会、1974年、43ページ）

旅情とは、旅の中で感じる特別な気持ちのことである。見知らぬ土地への期待や、美しい景色に感動する心、どこか切なさや寂しさを感じる瞬間など、さまざまな感情が重なり合った、しみじみとした心情を意味する。このような考えをもとに制作されたのが、『爽やかな秋の風 秋の音：週末は温泉一泊の旅』（図2）である。画面いっぱい描かれているのは、ススキ畑を走る機関車の姿であり、旅情を感じさせる表現となっている。これ以降、この考え方は変わらず、数多くの観光ポスターが制作された。春の花咲く風景が描かれた『いでゆの里は花ざかり』（図3）や、夏の山岳風景が描かれた『日本の涼線 アルプス・高原へ』登山列車』（図4）など、旅の風景はポスターの主要な題材となっている。これらの作品では、やや抽象化された風景が描き版による色面分割によって表現されており、中間色を用いた柔らかな色彩がポスターの魅力を生み出している。そのほかに、地域の特産品や季節行事に関するポスター（図5）なども

に金野弘の観光ポスターをご覧いただけると幸いです。

### 参考文献

- ・金野弘「国鉄のポスター」『デザイン理論』13号、意匠学会、1974年
- ・「金野弘のポスターアート」を編む会
- ・『年々彩々 金野弘のポスターアート』1978年
- ・「碑 脇清吉の人と生活」脇清吉の碑をつくる会、1967年
- ・沢田トヨ「あるいしぶみの声」皆美社、1977年
- ・嶋田厚、津金澤聡廣編「復刻版「プレスアルト」」柏書房、1996年
- ・西村美香「プレスアルト研究会にみる広告物収集とその意義について」『デザイン理論』34号、意匠学会、1995年



図1 金野弘（「まずまず便利になった北陸観光準急ゆのくに号 5月中毎日運転」1955、大阪鉄道管理局。AN.3672-01）



図2 金野弘（「爽やかな秋の風 秋の音：週末は温泉一泊の旅」1955、大阪鉄道管理局。AN.3436-01）



図3 金野弘（「いでゆの里は花ざかり」グループ旅行のイラスト、花のやぶの歴史めぐり、1962、大阪鉄道管理局。AN.3436-07）



図4 金野弘（日本の涼線 アルプス・高原へ一登山列車 7月16日から増発 1966、大阪鉄道管理局。AN.3436-06）



図5 金野弘（「初秋の工芸院展」9月10日発売10コース!! 秋の味覚祭り、立山・黒部アルペンルート・富士箱根・美作三湯・南紀の海」1973、国鉄大阪。AN.3436-41）



図6 金野弘（「あなたのお席です！ 11月23日から年末・年始のご帰郷旅行に、いからず座れる。発車着席券。こしも郵便で、お席の予約を承ります。」1968、大阪鉄道管理局。AN.3672-35）



図7 金野弘（「より便利により快適に47年10月2日時刻改正 京都から山陰直行の特急ルート開設 特急あさしお号 1日4往復!!」1972、国鉄大阪。AN.3436-59）



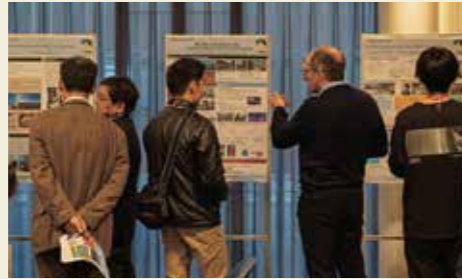
図8 金野弘（「新春の温泉プラン 別特急でゆくおトクなオールド旅行 道後温泉へ」1963、関西汽船。AN.3673-10）

## JoinTECH-Seminar 2025を開催しました

2025年11月18日[火]～19日[水]

左：学生による成果発表のポスターセッションの様子  
右：プレゼンテーションで自身の経験を発表する学生たち

2025年11月18日(火)、19日(水)の2日間にわたり、JoinTECH-Seminar 2025「TECH LEADERS Ready for a Complex World」を本学で開催しました。このセミナーは、文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に採択された日欧教育連携プログラム「3×3教育制度の活用によるグローバルな次世代マテリアル人材育成プログラム」の1年目の成果を共有し、今後について考える機会として行ったものです。



2日間にわたって行われた「JoinTECH Laboratoryプレゼンテーション」では、本プログラムに参加し、相手大学で研究活動に取り組んだ日欧の学生による成果発表が英語で行われ、発表後には参加者との活発な質疑応答が行われました。また、研究成果や留学先での様子をまとめたポスターセッションも多く参加者の関心を集め、1年間の活動成果を広く発信する場となりました。



## 京都コンサートホールにて令和7年度学位記授与式及び令和8年度入学宣誓式を挙行了しました

学位記授与式：2026年3月23日[月]  
入学宣誓式：2026年4月6日[月]

京都コンサートホールでの学長祝辞の様子  
(学位記授与式)

2026年3月23日(月)、令和7年度学位記授与式を挙行し、学部・大学院総勢1,114名の卒業・修了生が新たな一歩を踏み出しました。吉本昌広学長は祝辞の中で、コロナ禍での経験に触れ、自らの専門分野から越境し、異分野の人たちとの交流や他流試合に挑むことの大切さを語りました。



また、2026年4月6日(月)には、令和8年度入学宣誓式を挙行し、工学部および工学科学研究科の新入生を迎え、学部および大学院博士前期・後期課程の各代表学生が学業に一生懸命励むことを力強く宣言しました。

## 小林茂樹 文部科学副大臣が本学を視察されました

2026年3月27日[金]

左：KYOTO Design Lab視察の様子  
右：学生との座談会(大学会館)の様子

2026年3月27日(金)、小林茂樹文部科学副大臣および文部科学省関係者が本学を訪問されました。当日は、吉本昌広学長が本学の教育・研究活動の現状を説明し、理事らと交えて多岐にわたる意見交換がなされました。学内視察では、まず「KYOTO Design Lab」を案内し、デザインと建築を柱とする領域横断型の教育・研究拠点として推進してきた取り組みや、循環型社会を目指すデザイン研究の事例、デザインファクト



リーなどの施設を紹介しました。次に、国際規格に適合した「電波暗室」を視察され、次世代通信技術や高度な計測の基盤となる施設の仕様について説明を行いました。視察後の座談会では、学生たちが日頃の研究内容や課外活動(学生フォーミュラ参戦プロジェクト「Grandelfino」)の成果を披露しました。小林副大臣との対話は、学生たちにとって自身の学びを社会にどう生かすかを考える、極めて有意義な場となりました。



## 社会医工学研究センターの紹介

CPF News

未来デザイン・工学機構  
(Center for the Possible  
Futures : CPF) の  
活動を発信します。

社会医工学研究センターは、未来デザイン・工学機構の新規ラボセンターとして2025年4月に設立されました。このセンターの前身であったバイオメディカル教育研究センターは、応用生物学、繊維学、生体分子関連研究者の共同研究を推進し、カイコを利用した生体素材研究や細胞、動物モデルを用いた基礎的な分子生物学的研究の展開により実績を上げてきました。しかしながら、本学における医工学研究の推進には、より広い分野の研究者、あるいは学外研究機関との連携が必要となってきました。さらに、近年の社会背景においては、「医工学研究」そのものが大きな概念的転換を求められています。地球環境の急速な変容は、私たちの健康や医療に大きな影響を及ぼしており、当事者である患者(私たち自身)にとっての幸福を考えると、従来の「疾患中心」の医学から、より「人間中心の医学」への転換が必要となっています。こうした背景のもと、本学におけるあらゆる学域や学系を包括できるような「包括的医工学研究」を目指し、本センターが設置されました。

本センターは2つの大きなグループによって構成されています。1つは「生体医工学研究グループ」です。これは、これまでバイオメディカル教育研究センターで培ってきた生体素材や細胞内代謝、疾患モデル動物の作製に関する共同プロジェクトを展開するものです。生物学、材料科学、繊維学の研究者が連携することで、本学における「ソリッドな」医工学研究の展開に実績のある研究者が集結しています。もう1つは「社会医工学研究グループ」で、積極的に医療・福祉の現場に介入する

ことにより、当事者のQOL向上と維持を目指すものです。この研究グループは情報工学、デザイン・建築学、電気電子工学など多彩な研究者で構成されており、「社会医工学」という本センターの大きな要となっています。これら2つのグループが相互に関係性を持つことで、分野を超えた階層縦断的な研究プロジェクトの展開が期待されます。

本センターの開所を記念し、2025年10月に開所シンポジウムを60周年記念館1階ホールにて開催しました。当日は、未来デザイン・工学機構の機構長である山下兼一教授からの開会の挨拶、次いで本センターを構成する6名の教授によるプロジェクト紹介を行いました。さらに特別講演として、九州大学大学院工学研究院の山西陽子教授に「細胞工学の新潮流：人工物導入とアバター細胞の創成」というタイトルでの特別講演をしていただきました。当日は100名近い参加者が集まり、学生からも多数の質問があり、議論は大いに盛り上がりました。2026年度は新しい教員の参画による新規プロジェクトの立案も計画されています。また若手研究者の研究発表、海外研究者の招聘による国際シンポジウムなども企画しており、多数の教員、学生のみなさんの参加を歓迎いたします。本センターが本学独自の医工学連携研究のためのフラッグシップとなり、自由闊達な議論とユニークな研究を推進・支援できればと強く願っています。

(社会医工学研究センター長 野村真)



1：60周年記念館で開催された、社会医工学研究センター開所シンポジウムにおけるセンター長の説明(2025年10月2日)

2：バルセロナ大学のCedric Boeckx教授を招待しての特別講演(2025年12月10日)

3：韓国・啓明大学におけるシンポジウムでのデザイン・建築学系 阪田弘一教授による講演(2026年3月9日)

4：センターにて学生旅費支援を行った「第48回日本分子生物学会」での研究発表終了後の様子。昆虫工学の学生は「MBSJポスター賞」を受賞(2025年12月3-5日)



## 入試に関する最新情報について

本学の教育・入試情報を知っていただく機会として、各地で開催される進学ガイダンスにブース参加、資料参加を行っています。参加するガイダンスの一覧は、以下に掲載し、随時更新しますので、お近くの会場で開催される際はぜひお越しください。



<https://ac.web.kit.ac.jp/02/nyushi/gakubu/guidance.pdf>



[https://www.kit.ac.jp/test\\_index/](https://www.kit.ac.jp/test_index/)

その他、ミニ講義動画をはじめ、受験生の方にご覧いただきたい情報を以下に掲載しておりますので、こちらもぜひご確認ください。

## 令和9年度（令和8年度実施）入学試験関係日程表 | 学部

入試種別	出願受付期間	試験実施日	合格者発表日	入学手続期間
私費外国人留学生入試	7月28日〔火〕～8月3日〔月〕	8月25日〔火〕	9月2日〔水〕	9月4日〔金〕～9月10日〔木〕
ダビンチ入試（総合型選抜）	9月1日〔火〕～9月8日〔火〕	第1次選考   10月3日〔土〕 最終選考   11月7日〔土〕	10月21日〔水〕 11月18日〔水〕	11月19日〔木〕～11月25日〔水〕
学校推薦型選抜	1月20日〔水〕～1月27日〔水〕	-	2月10日〔水〕	2月11日〔木〕～2月17日〔水〕
一般選抜	前期日程   1月25日〔月〕～2月3日〔水〕	2月25日〔木〕 / 26日〔金〕	3月10日〔水〕	3月11日〔木〕～3月15日〔月〕

詳細は各募集要項にて確認してください。

## 令和9・8年度（令和8年度実施）入学試験関係日程表 | 大学院

入試種別	出願受付期間	試験実施日	合格者発表日	入学手続期間
博士前期課程（修士課程）   一般	第Ⅰ期   7月13日〔月〕～7月21日〔火〕 （資格認定申請締切 6月1日〔月〕）	8月19日〔水〕 / 20日〔木〕	9月2日〔水〕	11月19日〔木〕～11月25日〔水〕
	第Ⅱ期   9月8日〔火〕～9月15日〔火〕 （資格認定申請締切 7月24日〔金〕）	10月10日〔土〕	10月21日〔水〕	11月19日〔木〕～11月25日〔水〕
	第Ⅲ期   11月2日〔月〕～11月10日〔火〕 （資格認定申請締切 10月5日〔月〕）	12月5日〔土〕	12月16日〔水〕	2月11日〔木〕～2月17日〔水〕
博士前期課程（修士課程）   社会人	11月2日〔月〕～11月10日〔火〕 （資格認定申請締切 10月5日〔月〕）	12月5日〔土〕	12月16日〔水〕	2月11日〔木〕～2月17日〔水〕
博士前期課程（修士課程）   外国人留学生	11月2日〔月〕～11月10日〔火〕 （資格認定申請締切 10月5日〔月〕）	12月5日〔土〕	12月16日〔水〕	2月11日〔木〕～2月17日〔水〕
博士前期課程（修士課程） 秋入学   社会人	第Ⅱ期   7月13日〔月〕～7月21日〔火〕 （資格認定申請締切 6月1日〔月〕）	8月19日〔水〕 / 20日〔木〕	9月2日〔水〕	9月4日〔金〕～9月10日〔木〕
博士前期課程（修士課程） 秋入学   外国人留学生	第Ⅱ期   7月13日〔月〕～7月21日〔火〕 （資格認定申請締切 6月1日〔月〕）	8月19日〔水〕 / 20日〔木〕	9月2日〔水〕	9月4日〔金〕～9月10日〔木〕
博士後期課程   一般 / 社会人	第Ⅰ期   7月13日〔月〕～7月21日〔火〕 （資格認定申請締切 6月1日〔月〕）	8月21日〔金〕	9月2日〔水〕	11月19日〔木〕～11月25日〔水〕
	第Ⅱ期   11月2日〔月〕～11月10日〔火〕 （資格認定申請締切 10月5日〔月〕）	12月5日〔土〕	12月16日〔水〕	2月11日〔木〕～2月17日〔水〕
博士後期課程   外国人留学生	11月2日〔月〕～11月10日〔火〕 （資格認定申請締切 10月5日〔月〕）	12月5日〔土〕	12月16日〔水〕	2月11日〔木〕～2月17日〔水〕
博士後期課程 秋入学   一般 / 社会人 / 外国人留学生	7月13日〔月〕～7月21日〔火〕 （資格認定申請締切 6月1日〔月〕）	8月21日〔金〕	9月2日〔水〕	9月4日〔金〕～9月10日〔木〕

詳細は各募集要項にて確認してください。

## 美術工芸資料館展覧会

開催期間	展覧会名等
6月1日〔月〕～7月11日〔土〕	旅するところをのせた 金野弘の観光ポスター
6月8日〔月〕～7月16日〔木〕	Violaine Vieillefond展—万物流転 水の音・色・紋
7月27日〔月〕～9月12日〔土〕	博物館実習展（仮）
7月30日〔木〕～10月24日〔土〕	戦いのデザイン / 遊びのデザイン
10月2日〔金〕～10月24日〔土〕	SDレビュー 2026 第44回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展 京都展

※会期・内容は変更となる場合がございます。事前に美術工芸資料館ホームページでご確認をお願いします。

## 8月以降の主なイベント

開催日	イベント	参加費	参加申込の必要	問い合わせ先	会場
8月7日〔金〕 / 8日〔土〕	オープンキャンパス2026	無料	有 （一部予約不要の プログラムあり）	総務企画課広報係 TEL：075-724-7016 E-mail: kit_oc@jim.kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス

※詳細情報、申込方法はホームページでご確認をお願いします。

## 京都工芸繊維大学基金へのご協力に心より御礼申し上げます

本学では、皆様からのご支援により、学生、教員への支援助成などの基金事業を実施しております。令和7年度も皆様から多大なご理解・ご協力を賜りましたこと、改めて御礼申し上げます。



京都工芸繊維大学基金

### 大学公式SNS

日々更新中です。ぜひご覧ください。

[X (旧Twitter)]



@pr\_kit

[Facebook]



<https://www.facebook.com/KIT.Kyoto>

[LINE]



@k-i-t

### KITnews Vol.71

〔編集 / 発行〕発行日：2026年5月25日〔月〕

国立大学法人京都工芸繊維大学

〒606-8585京都市左京区松ヶ崎橋上町

TEL | 075-724-7016

FAX | 075-724-7029

URL | <https://www.kit.ac.jp/>

表紙写真は「和楽庵」2階の上げ下げ窓です。

和楽庵は、京都市左京区の南禅寺塔頭跡にあった

歴史的建造物の洋館部分を移築したもので、

本学の前身である京都高等工芸学校の

初代教授・武田五一の設計です。

表紙裏P1-2の写真は、

本学名誉教授・岸和郎氏が設計した

「KIT HOUSE」です。

1階には食堂「ORTUS（オルタス）」、

2階には購買部があり、食事はもちろん、

友人と談笑したり課題に取り組んだりと、

学生たちの日常に欠かせない施設となっています。

© 2026 Kyoto Institute of Technology

All Rights Reserved

KITnewsをお読みいただき、

ありがとうございました。

今後のKITnewsの改善・充実を図るため、

右記URLまたはQRコードより

アンケートへのご協力をお願いいたします。

（回答期限 2026年8月31日〔月〕）



[https://www.kit.ac.jp/kitnews\\_anketo/](https://www.kit.ac.jp/kitnews_anketo/)



